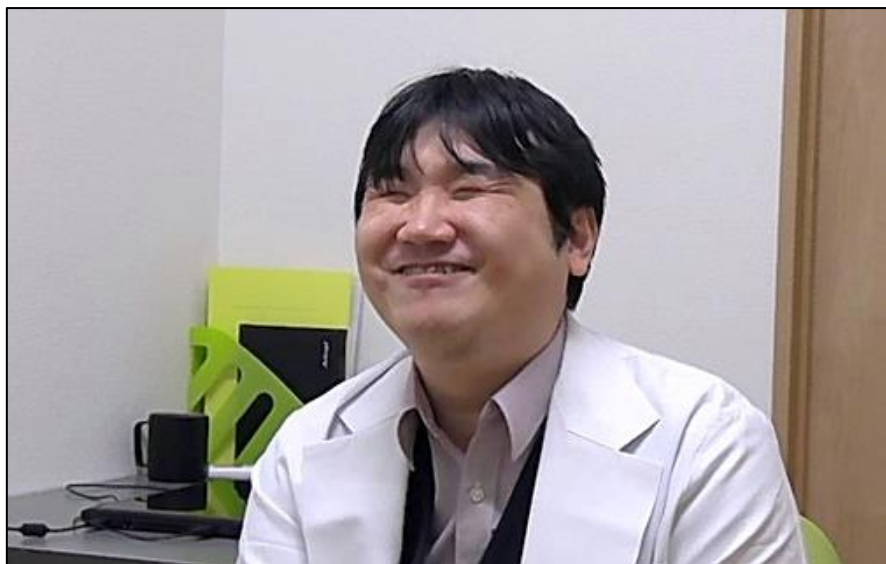


## 1. 受賞者紹介

### 〔1〕 ありのまま自立大賞

福場 翔太 氏

〔北海道在住〕



#### ●プロフィール

1980（昭和 55）年、広島県呉市生まれ。幼少時にドラえものの映画に行った際に周りの人と比べて暗い場所が見えにくい・見えている範囲が狭いことを何となく自覚するが、暗い場所だけ手を引いてもらえば生活に支障はなかった。

1987（昭和 62）年、呉市立五番町小学校に進学。同級生を登場させる漫画を執筆、トランペット鼓隊では中太鼓を担当。

1993（平成 5）年、広島大学附属中学校に進学。マイクロワールド研究班に所属しパソコンのブラインドタッチを習得、嘉門達夫氏のラジオ番組のハガキ職人となる。

1996（平成 8）年、同附属高等学校に進学。仲間とバンドを組み楽曲作り、図書委員会に所属し小説の執筆に熱中。

1999（平成 11）年、上京して東京医科大学に進学。音楽部と柔道部に所属し引退まで継続。5年生時、眼科の臨床実習中に持病の網膜色素変性症が判明。以降急速に視力低下が進行し卒業はするも医師国家試験は不合格。放浪しながら将来を模索する中で、日本網膜色素変性症協会（JRPS）の講演会、ドラえもん映画、嘉門達夫氏の新番組などが答えを見つけるヒントとなり国家試験再挑戦を決意。合格後、視覚障害の事情を受け入れてくれる就職先を探し、2006（平成 18）年、北海道の美唄希望ヶ丘病院に着任。

その後、精神科医としての経験を積む中で視力低下は進行、人の顔の判別も文字を読むこと

も不可能となり引退も考える。

2012（平成24）年、『視覚障害をもつ医療従事者の会 ゆいまーる』と出会い、仲間を知り、音声読み上げソフトを用いればまたパソコンが操作できることも教えてもらい、医師の仕事をするための勇気と知恵を得る。以降は美唄すずらんクリニックの副院長として、依存症回復プログラムや就労支援勉強会、デイケアでのギター合唱プログラムなど、視力を用いなくても行なえる集団療法を積極的に担当。

2018（平成30）年、学生時代の先輩医師の誘いで眼科の講演会に登壇、自身の障害を開示した初めての講演で、ようやく視覚障害と一緒に働く方法が見つかる。2019（令和1）年、ホームページを立ち上げ情報発信開始、視覚障害者支援を行なう『公益社団法人 NEXT VISION』の理事に着任。

現在、精神科医として地域医療に当たりながら、当事者として視覚障害者の心のケアに関する講演活動・執筆活動、そしてライフワークとして楽曲製作・小説執筆も継続している。

## ●仕事

精神科医

## ●障害名

網膜色素変性症

## ●医師を目指そうと思ったきっかけ

医者が多い家系に育ったため、子供の頃から塾に通い、医者にならなければならないようなプレッシャーを感じていた。そのため医学部に入学しても医師として働く気持ちにはなれずにいた。しかし国家試験に落ちようやく流れから解き放たれて一年間放浪する中でこれまでできなかった多くの経験をし、ようやく自分の意志で医師の仕事をしようと思えた。ただあと一年遅れていたら視力の低下が進行して通常形式の国家試験受験は不可能だったであろうから、この医師免許はたまたま神様が配ってくれたトランプのカードのような気がしている。大切なカードではあるが、これが配られなかった人生も十分に有り得た。今でも毎朝出勤前に迷いはある。その迷いも大切にして、このカードに縛られるのではなくどう活かすかを考えたいと思っている。

## ●診察で大切にしていること

精神科は医者がワンマンになってしまうと支援が支配になってしまう危険な医療。そのため常に自分を振り返る気持ちを忘れず、力加減や方針が間違っていないかスタッフと話し合うことを大切にしている。幸い視覚障害のおかげで、患者さんの情報を教えてもらったり、処

方が間違っていないかダブルチェックしたり、スタッフとのコミュニケーションが診療中に自然にたくさん生まれている。僕の医師免許は自分一人では何の役にも立たない、助けてくれるスタッフと患者さん、みんながいてくれて成立している医師免許だと思っている。また支援者は安全や保身の意識で患者さんの回復のチャンスを奪ってしまうことも少なくない。しかし心の回復で大切なのは「誰かの役に立つこと」、失敗のリスクがあったとしても患者さんの「誰かの役に立ちたい」という願いは応援したいと思っている。僕自身も障害当事者として、「誰にも迷惑をかけなかったけど誰の役にも立たなかった人生」よりも「たくさん迷惑もかけたけど少しは役に立ったと思える人生」を生きたい。

## ●思い出に残る出来事

外来で診察中に壁の画びょうがはずれて落ちてきたカレンダーを患者さんが僕にぶつからないようにとっさに受け止めてくれたり、病棟で迷子になっていた僕を患者さんが出口まで誘導してくれたり、そんなふうに患者さんが助けてくれた場面はよく憶えている。心についてはこちらが支援者、でも視覚についてはこちらが支援者。持ちつ持たれつ。診察室を出る時に「ありがとうございました」と患者さんが言ってくれるのに対して、「こちらこそありがとうございます」と返せる関係が嬉しい。

## ●趣味

音楽と小説の創作活動は中学・高校時代からずっと続けている。国家試験に落ちようが、北海道に住むことになろうが、目が見えなくなろうが、曲が浮かんだら録音して、アイデアが浮かんだら小説を書くことはずっと変わらない。どうしてもと言われても好きだからとしか答えようがない。でもきっと創作活動に没頭している時は、医者という支援者でも、視覚障害者という当事者でもなくなっている時間なんだろうと思う。また「何か曲や小説のアイデアはないか？」と思いながら暮らすことで、毎日が何倍も味わい深くなるような気がする。

## ●座右の銘

「運命は変えられないが、人生なら変えられる」

## ●今後の目標

肩書きが自分の名前よりも前に出ないように頑張りたい。医者であることも、視覚障害者であることも、大切な自分の一面ではあるが全てではない。ギターや推理小説が好きなこともそう、ドラえもんが好きなこともそう、全部大切な自分の一面で、その集合体が福場将太という人間。そして人間は誰もがそんな多面体。人には表に見せていないそれぞれの事情がある。相手に自分をわかってもらうためには自分も相手をわかろうとしなければならないこと

を忘れずに、優しい想像力を働かせて生きていきたい。

## ●受賞談話

この度の賞をいただくに当たり、改めて『自立』という言葉の意味について考えてみた。自分で立つと書いて自立、だが僕は全く自分だけで立っているわけではない。仕事だって生活だってたくさんの人たちに支えてもらっているし、心だって懐かしい思い出や愛しい出会いに支えられている。だから自分も誰かの支えになれたらと思う。

きっとそれが僕にとってのありのままの自立なんだろう。自分だけで立つのではなく、持ちつ持たれつの支え合いに参加して立っていただけること。僕の人生にはおかげ様、お互い様と思える人たちがたくさんいる。その人たちに心から感謝して、この度の賞をお受けしたい。本当に、いつもありがとうございます。そしてこれからもよろしく！

## 【選考理由】

医師を目指す中で、進行する難病による視覚障害で様々な困難に直面しながらも、ひとつずつ困難を克服し、医師になることを諦めず、国家試験に合格し医師免許を取得されました。医師は五体満足が当たり前、健全でなくてはならない、弱さを見せてはいけないという、私たちが当たり前で捉えてしまっている概念を崩し、障害の有無に関わらず医師もひとりの人間であり、それはすべての人に当てはまることを自らの姿で実践され、患者さんと向き合っておられます。他の医師と同じようにどう仕事をするかではなく、発想を変え、視覚障害を活かして障害と一緒に働く道を見出し、その姿や思いが患者さんに伝わっているからこそ、時には患者さんに助けてもらいながら、共に支え合い、周りの方に役割や励ましを与える存在となっています。これまでの厳しい道のりの中で困難を乗り越えながら、常に前向きに生き、その生き方は障害の有無に関わらず、ともに生きる社会を生き、医師としての職務を果たす姿はありのまま自立大賞にふさわしく今後の活躍を期待したいと思います。



趣味である音楽を活用し、デイケアでは合唱プログラムに取り組んでおられます。